

実践のひろば

古川宗治

「みんなでわかってできる体育の授業づくり」に取り組んだ校内研究

1. はじめに

「みんながわかってできる喜びを

感じる」ことのできる体育の授業づくり」

どこかの支部大会のテーマになっていそうな
…でもこれが、私の勤務する鳥見小学校での校
内研究のテーマです。

今、流行の「体力づくり」ではなく、「体育
で何を学習するのか」ということを、学校全体
で問い直したこの3年間。また、同志会の体育
実践の素晴らしさを改めて感じた3年間でもあ
りました。研究主任という立場で本研究に携わ
ることになった、その軌跡を紹介します。

2. 異動して1年目

鳥見小に異動してきたのは、今から7年前。
その初年度は、担任を持たずに、算数の少人数
指導を担当することになりました。

当時、鳥見小では週3コマの体育の内、1コ
マが学年の合同体育として設定されていまし
た。その合同体育の授業前日には、職員室では
よくこんな言葉が交わされていました。

「明日の合同体育、何する？」

「ドッジボールしよっか。男女分かれて。」

ほとんどの学年で、合同体育は1時間ずつと
ゲームをさせているような状態でした。

前任校に初任で勤めた際には、すでに同志会
員がおられて、同志会の体育がごく普通に実践
されていました。各学年のファイルケースには
グループノートの原稿があり、夏には校内でド
ル平の講習会が行われている、そんな前任校で
したので、あまりにもかけ離れた状態に、大き
な衝撃を受けました。

しかし、そんな状況を支部で話すと、「同志
会の体育がないところが当たり前。」「前任校で
も、その1人の同志会員がそういう環境を作っ
ていったんだ。全国の会員は、それぞれの職場
で必死に実践を行い、同志会の実践を少しずつ

広めようとしているんだ。」というお話が返っ
てきました。

この学校でも、私にできることがあるんじや
ないか。まずはできることから始めよう。そし
て最終目標として、校内の体育の授業改革をし
ていきたいと、考えるようになっていきました。

3. まずは知ってもらおうことから

異動してきて1年目の私にできることを考え
ました。

鳥見小は、教職員が30人を少し越えるくらい
の規模で、夏期休業中に2種類の職員研修が設
定されています。1つは、全員参加の「全体研
修」。そして、もう1つが「自由選択研修」と
いうものです。

この「自由選択研修」とは、各教員が得意な
分野で自らが講師となって、開く研修です。（講
師をするのも、受けるのも完全に自由です）

こんないい機会はないだろうと、私は3つの
研修を設定しました。内容は、「マット」「ドル
平」「ボール運動」です。

異動してきたての算数担当が開く体育の実技
研修に、参加者がどれくらいあるか…とても不
安でしたが、蓋を開ければ、どれも10人程度の
参加がありました。

研修では支部の実技講習会のように、実技を
通して系統性を持った学習内容を提示したり、

実際に使用したグループノートを紹介したりしてみました。

参加者の反応はよく、参加できなかった方からは資料やノートのデータを求める声も届きました。また、奈良県の教員採用試験には、体育の実技試験が必ず含まれていたため、講師の方にとってのニーズも高かったようです。

4. 研究主任となつて

2年目からは、学級担任を持つことになり、細々とではありましたが、同志会の体育実践を重ねていきました。

また、体育主任を引き受け、体育教具の整備、体育行事の活性化、授業に活用できるワークシートの整理を進めていきました。また、会議や研修の際には、折に触れ、体育学習の充実の必要性に言及していました。

そして今から4年前、何の運命の巡り合わせか、私のところに「研究主任」という役がまわってくるようになりました。その当時、鳥見小では算数の研究に取り組んでおり、研究のまとめの1年間を担当することになったのです。

そこで、私は考えました。「この1年間で、算数の研究が終わる。来年度からは、また別の研究テーマが設定される。そのテーマを何とかして体育にできないか」

小学校に勤務されている方には分かっていた

だけるかと思いますが、校内研究のテーマとなる教科は、国語や算数が圧倒的に多いです。（奈良市内にある約40校を見ても、当時体育を研究していた小学校は、本校以外では1校のみ。その1校も、テーマは「体力づくり」でした）かなり高いハードルであることは分かっていたのですが、研究主任を引き受けているこの機会を逃すと、体育を研究する機会、体育の授業改革をする機会はもう二度と巡ってこないということも明白でした。そこから、私の挑戦が始まったのです。

5. 勝負の1年

この1年間で、周りの教員に「今の体育の授業ではいけない」「体育を研究したい」というように思ってもらえるには：

まずは、若手教員に伝えていこうと考え、「放課後学習会」というものを開きました。

当時の鳥見小学校は、経験5年未満の若手教員が約半数という年齢構成となっており、ベテランが若手にきめ細かく指導するということが極めて難しい状況でした。

そこで、「ベテランの技を、若手みんなで教えてもらおう！」を合い言葉に、ベテラン教員に講師となってもらい、放課後に学習会を開くことにしたのです。内容は、教科学習から、学級経営や教室環境、家庭訪問や学級懇談会に至

るまで、多種多様なテーマを設定しました。

そこで私は、自分の体育の授業のことを紹介したり、体育のグループノートを閲覧できるように展示したりと、体育実践に少しでも興味を持つてもらえるように試行錯誤を重ねました。

そんなことが功を奏したのか、初任研で行う授業研に体育を選んだり、学年主任にこんな体育の授業をしたいと申し出る若手教員が始めたりしました。他学年から資料を求められることも増えてきて、放課後学習会での会話では、体育の授業の話題が多くなっていきました。

前述の夏期休業中の選択研修では、ベテランの女性の方も多く参加して頂き、明らかに校内の体育に関する意識が変わってきた実感がありました。

そして、年度末。算数の研究のまとめが終わりに、次年度の研究テーマの希望調査が行われました。そこで出てきた希望の半数以上が、「体育の授業づくりについて」だったので、これまでの草の根運動とも言える活動が、こんな形で実を結ぶとは、思いもありませんでした。

そして職員全体での検討の結果、次年度から3年間、体育の授業研究に取り組むことが決まったのです。

6. 体育研究のはじめの一步

研究一年目、まずはテーマを決めることにな

りました。

鳥見小は、以前に特別支援教育を研究していたこともあり、関わる子どもたちも多く在籍しています。その多くは、通常学級での体育に参加していました。

そこで、その子どもたちも含め、どの子どももわかってできるようになる授業をつくってほしいと、「みんながわかってできる喜びを感じる」とのできる体育の授業づくり」というテーマが生まれました。

検討の結果、研究する領域は1つに絞ることとなり、「わかる」「できる」がはっきりしていて、その授業の検証もしやすい「器械運動」に取り組むことになりました。

授業公開は「全学年（特別支援学級も含めて）で器械運動の授業公開を行う」ことに決まりました。全学年というところに、難色を示す方もいたのですが、数多くの実践を見てみたいという声が出て決定しました。

その当時、校内には体育科の教育課程は存在せず、各学年の年間計画があるだけでした。さらに、その内容は「とび箱」「鉄棒」というように、教材名が羅列されているだけでした。

そこで、授業づくりと平行して、「器械運動の教育課程作成」に取り組んでいくことになりました。

7. 1年目の研究

まず、器械運動の授業づくりについての全体研修を持ちました。講師には大阪支部の安武一雄氏を招き、器械運動の授業について熱く語って頂きました。その後、私が体育館でその実践を行うという流れで研修を進めました。その研修を受けて、各学年が実践を作っているから、どうしても同志会実践に近いものになります。

1年目の授業公開は次のようになりました。

1年目の授業公開

1年	鉄棒「お話鉄棒」
2年	鉄棒「こもりふり」
3年	マット「側転」
4年	跳び箱「ひねり横跳びこし」
5年	跳び箱「ネックスプリング」
6年	マット「シンクロマット」
特支	サーキットトレーニング

4年生までの全学年で「ねこちゃんたいそう」や「動物歩き」を行い、授業後の研究協議でも、「ねこちゃんたいそうの〇〇の姿勢が…」「ぞうさんのふりあげ足が…」といった意見が出されるなど、研究協議では同志会の例会に参加しているような錯覚を受けるほどでした。

何よりうれしかったのは、どの学年の子どもたちも、器械運動が好きになっていったという事実でした。多くの教員が手応えと、達成感を感じた1年目の研究でした。

また、研究用の、職員図書を購入する機会もあり、輝くシリーズや小学館の教育MOOKシリーズを買いそろえていきました。職員室のすぐ手に取れるところに、同志会の書籍が並んでいることも、実践が広まっていった一つの要因であったと思います。

8. 2年目以降の研究

初年度の研究が終了し、次年度の研究領域を決定することになったのですが、器械運動をさらに深める、新しい領域（特にボール運動）を研究する、という意見に分かれました。

そこで、折衷案ということで、低中高の各学年で器械運動1本、ボール運動1本の授業公開を行うことになりました。

夏期休業中の職員全体研修をどのように設定しようかと考えていたのですが、4年生がフラッグフットの実践を考えているということもあり、私が講師となって「フラッグフットの実技研修」を行うことにしました。

実技研修では、若手もベテランもみんな必死になって作戦を立てながらゲームに参加するとともに、教える中身についても考えていました。

ボール運動についても、「わかる」を大切にしながら授業づくりを目指していくことを確認できました。

2年目の授業公開

1年	ボール「シユートボール」
2年	マット「お話マット」
3年	鉄棒「連続技づくり」
4年	ボール「フラッグフット」
5年	ボール「キックベース」
6年	鉄棒「後方支持回転・連続技」
特支	ボール「まとあてゲーム」

授業公開には、講師として奈良市の指導主事を招き意見をもらいました。

研究協議では、指導主事に「男女共習の意義」「グループ学習の効果」「わかることの大切さ」について語ってもらい、さらに同志会実践に近いものが根付いていく実感が得られました。

そして、まとめとなった3年目。こちらも、研究領域に関する様々な希望が出てきて、まとめることが困難になりました。

そこで、授業研究は、低中高の各学年でボール運動1本は必須、残り1本は、各学年部子どもたちの実態に合わせて決めるということになりました。

どの学年も、男女共習のグループ学習の形態が取られており、その1時間の授業で、どのよ

うなことを「わかって」「できる」ことを目指しているのか、そのことを意識して授業がつけられていました。

3年目の授業公開

1年	マット「お話マット」
2年	鬼あそび「しっぽとりゲーム」
3年	陸上「箱跳び走」
4年	ボール「サッカー」
5年	ボール「タグラグビー」
6年	ボール「ネット型ゲーム」
特支	ボール運動アラカルト

9. やいばこ

紙面が少なくなってきたので、これまでの研究の成果と課題をまとめてみました。

【成果】

- ・教師の体育に対する考えが大きく変わった。
 - ・体育の授業が、劇的に変化した。
 - ・子どもたちが、体育がさらに好きになった。
 - ・校内の実践環境が整った。
 - ・(教具や、グループノートの資料など)
 - ・時間割から合同体育がなくなった。
 - ・器械運動の教育課程が完成した。
- (技の羅列のように見えるが、それぞれに教

える中身が内包されている)

【課題】

- ・教材について深く研究できなかったため、授業を観る視点が定まらず、研究協議では感想を述べて終わることが多かった。
- ・わかる内容を共有することが難しかった。
- ・3年間積み上げてきた実践を、これからも継続していく環境をどのように整備していくか。
- ・研究期間3年ではまだまだ全領域を網羅しきれなかった。

この3年間で、同志会実践の裾野が少しでも広がっていったらいいな、幸いです。全国のみなさん、これからも共にがんばっていきましょう。

(ふるかわ むねはる／奈良市立鳥見小学校)

